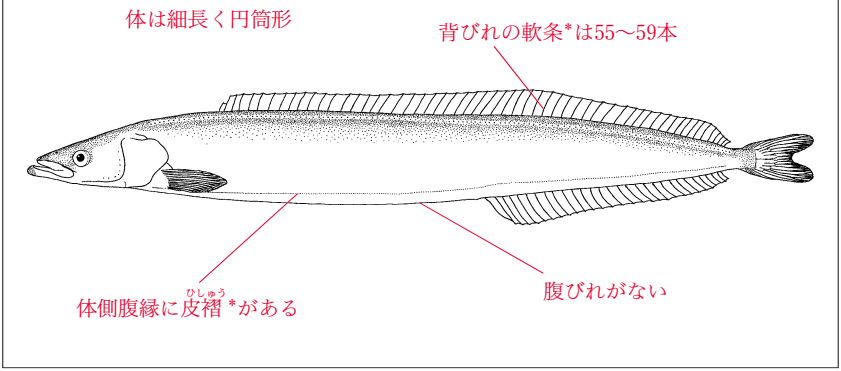
スズキ目Perciformes イカナゴ科Ammodytidae



51. イカナゴ *Ammodytes personatus* Girard 図版20

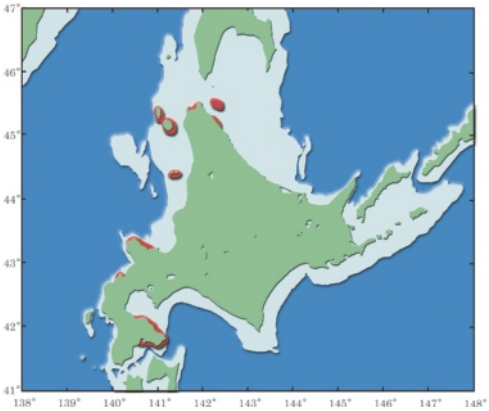
英　名　Japanese sand lance, sand eel
露　名　песчанка（ペスチャンカ）
地方名（北海道）　オオナゴ、オウナゴ、コオナゴ、コナゴ、チリメン、メロウド、モグリ、シラス、シラウオ
漢　字　玉筋魚（いかなご）、大女子（おおなご）、小女子（こなご）

【形態】　体は細長く、円筒形である。下あごが上あごより前に出ており、歯はない。各ひれは軟条*だけからなり、背びれは前後に長く、腹びれはない。体側には斜めに走る多数の筋がある。鰾（うきぶくろ）*を持たない。体側から腹部は銀白色、背部は青緑あるいは黄褐色。全長*27cmになる。

属*名のアンモディテスは「砂にもぐるもの」の意。宗谷（そうや）海峡周辺には、イカナゴとキタイカナゴの２種*のイカナゴ属魚類が生息している。この海域のキタイカナゴは、アラスカ湾などに分布するキタイカナゴ*Ammodytes hexapterus*と遺伝的に異なることが指摘されており、別種の可能性が高いが、分類学的な見直しが進んでいないため、本書では従来どおりキタイカナゴと呼ぶ。

宗谷海峡に分布するこれら２種は形態的に非常に似ており、分布域も重なっていることから、漁業では区別せずに扱っている。しかし、これらは生殖周期、遺伝子型*、脊椎（せきつい）骨数と尻（しり）びれ軟条数などに違いがあるので区別できる。また、宗谷海峡のキタイカナゴの側線*は背びれ基底*後端より前方で終わるが、イカナゴでは後方まで伸びることでも区別が可能である。

【生態】　イカナゴは沖縄を除く日本各地、朝鮮半島、遼東半島、山東半島の沿岸に分布する。キタイカナゴはより北方に生息するが、宗谷海峡ではイカナゴの分布と重なっており、釧路沿岸でもキタイカナゴの分布が確認されている。両種ともに夜間に海底に潜る習性を持つため、生息場所は底質が砂の所に限られる。



北海道におけるイカナゴの漁場

イカナゴは回遊*範囲が小さく群間の交流は少ないため、日本周辺各地に大小多数の群が存在する。しかし、遺伝子型によるとこれらは南北２つの大きな系群*にまとめることができ、その境界は日本海側では鳥取県沖、太平洋側では仙台湾である。

宗谷海峡のイカナゴの産卵期は４～５月、キタイカナゴは12～翌１月である。積丹（しゃこたん）半島周辺から寿都（すっつ）、島牧（しままき）沿岸でのイカナゴの産卵期は１～２月、津軽海峡の青森沿岸では３～４月、そのほかの海域では12～翌２月の間である。産卵期の水温は宗谷海峡で６℃以下、津軽海峡では８～10℃、そのほかの海域では12～18℃。群れをなし一度に放卵、放精を行うので、ニシンの産卵のような、群来（くき）と呼ばれる精液で海面が白く濁る現象が見られる。１産卵期間中に雌１個体が産み出す卵は合計1,000～10万粒で、同じ体長*では南の群れほど卵の数が多い。受精卵は付着沈性卵*で、淡黄色の球形で直径は0.7～1.0mm。宗谷海峡のイカナゴでは水温４℃の場合、受精から42日でふ化する。

イカナゴ仔魚（しぎょ）*の成長量は寿都、島牧沿岸では１日当たり0.5～0.8mm。満１歳から６歳までの体長は、宗谷海峡のイカナゴの場合、それぞれ14、17、19、21、22、23cmである。寿命は６年以上。キタイカナゴの成長もほぼ同様である。両種ともに、多くが満３歳で成魚*となる。

南の系群の体サイズは北の系群ほど大きくならない。例えば、満３歳魚の体長は瀬戸内海で14cm、伊勢湾、北九州では12cmである。また、多くは満１～２歳で産卵し、寿命も短く２～３年といわれる。

餌は主に動物プランクトンである。カイアシ類*、オキアミ類*が多いが、ヨコエビ類*、ヤムシ類*、まれに稚エビや仔稚魚*も食べる。伊勢湾では珪藻（けいそう）*類などの植物プランクトンも餌とする。一方、イカナゴはその成長段階に応

じて、動物プランクトンのヤムシ類から魚類、海獣類のトドまで、大小さまざまな動物に捕食される。

イカナゴの成魚*に食べられていたヤムシ類を観察すると、その消化管にイカナゴの仔魚が入っていたという例もある。

本州以南のイカナゴには、水温が高くなる夏の間、海底の砂に潜って暑さを避ける夏眠*と呼ばれる習性がある。水温が15〜19℃以上になると、砂の中に潜って餌をとらなくなり、この間、成長は停滞する。夏眠は7月から10月まで続くことがある。北海道のイカナゴにこの習性はない。